

狐の变化玉

語り手 野津 正恵

とんとん昔、山寺に和尚さんと賢い小僧さんがおったんだと。

ある日小僧さんが「和尚さん、寺の馬を貸してごしなさい」と言ったんだと。

「なんぼでも貸してやるがおまえさんどこへ行くだてね。」

「はい、山に狐を捕まえに行かかと思っちょうます。」と言うんだが。この辺りには人を化かす狐がようけおって、みんなたいそう困っちょったがどげすうこともできんだったとね

さて晩方になると小僧さんは馬を連れてとつことつとこ山の方に向けて上がって行きたげな。そげすう山の方に向けて、

「和尚さん、馬で迎えに来ましたでね〜」てて言ったんだと。そげすう、藪ん中から衣をつけた和尚さんが降りて来なつた。

「ああ、御苦労じやったの〜」てて馬に乗つたと。小僧さんは、

「この馬は若い馬で暴れたら危ないですけん。」てて言いながら、懐から荒縄を出いてかたにかたに和尚さんを馬に縛りつけて帰りかけたとね。和尚さんはおぞんなって、ちょんぼ下がった所で、

「これ小僧や、わしや小便がしたんなつた。ちょっし降ろいてごさんか。」てて言ったども、

「もうちょんぼしこらえてごしなさい。まだまだ危ないですけん」てて請け合つてごさんのだと。そげすうもそつと下つた所で、

「いやあもうちびりそうだ。早こと降ろいてごせ。」てて言うだども降ろいてごさんだつたんだつて。

そげしちょうなかいにそこんどこ、寺が見える所まで降りて来たとね。

小僧さんは寺の方向かつて大きな声で、

「和尚さん〜和尚さん〜、狐を捕まえて来ましたでね。早いこと火を焚いてごしなさい、焼き殺いてしまいましょうや〜」てて言ったんだと。

馬の上の狐はおべて、

「小僧さん小僧さん、こらえてごしなさい。この变化玉（へんげだま）ちゅうもんをあげますけん命だけはこらえてごしなさい」てて言ったげな。

この变化玉がないと狐は化けることができんげで、そげに大事なもんならてて、小僧さんはそれを貰つて狐を逃がしてやつたと。

狐はしょんぼらと山に向かつて帰る道々、『変化の玉を取られてしまつてどげしたらいいだらか…これが京都の稲荷神社に知れたらどげな罰を受けるだやらわからん』てて思案した挙句、山の狐の大將さん所へ相談に行きたげな。話を聞いた大將さんは、

「よし、わしが取り戻いちゃあけん」てて請け合つてごしなつたと。

それからしばらく経つたある日のこと、お寺の小僧さんが外に出らないけん用事が出来たと。小僧さんは出掛けに、

「和尚さん、この変化の玉は誰が来なはつても絶対に出いて見せちゃあいけませんよ」てて、ように言つて出掛けたげな。

しばらくして、お寺に庄屋さんが来らいたげな。庄屋さんは和尚さんに、

「この間、小僧さんが山の狐をこらしめて変化上を取つてもどつたげなが、今日はそれを見せて貰いに来ましたわ」

和尚さん困つたども、まあ庄屋さんが言われることだけんてて、

「小僧には内緒ですけん」てて変化の玉を庄屋さんに渡いたげな。庄屋さんは、

「はあ、これが変化の玉ちゅうもんですか。いやあ、みごとなもんですなあ」ててようにように見ちよらいと。

和尚さんは『せつかく庄屋さんがおいでだけん』ててお茶など入れらかと思つて台所へ行きたもんだがね。戻つてみりやあ庄屋さんはおられん、変化の玉はない。あいくそやられたと思つたが仕方がなかつたんだと。どげすうだと思っちょつと小僧さんが戻つて来たもんだけん和尚さんが小僧さんに話して謝ると、

「ええですけん、また取つて戻うますけん。和尚さん、紙を一丈買つてごしなさい」てて言ったんだと。小僧さんは買つてつた紙を持って今度は神社へ行きて、白い装束と冠を借りて紙で弊串を作り、そいつをえなつて山へ上がつて行きたげな。そいで大きな声で、

「狐どもよく聞け、わしは京都の稲荷神社から来た。皆出て集まれえ～」てて言ったと。
さて、狐が降りて集まると、
「皆集まったか？こないだはお寺の小僧に変化の玉を取られたてて聞いたがほんのことが。誰もが持つちようかどげか出して見せてみい」てて言ったと。
狐達のごっと玉を出して見せたら取り上げて、
「狐ども、我こそは山寺の小僧だ参ったかあ～」てて弊串で頭をどんどんたたいてまわったと。狐は大はいごんになってみんな飛んで逃げたてしまったと。狐よりお寺の小僧さんが上手（うわて）だったというおはなし。
こおでこっぼし。

語り手 出雲市佐田町 持田 ハマ子さん（明治33年1月生）
— 『佐田の民話と民謡』（昭和61年・佐田町・佐田町教育委員会発行）より —